

地方都市における祭礼の維持形態に関する考察

－鹿島神宮祭頭祭当番集落を事例に－

芳賀幹大・佐藤大輔・若松 英・王 嘉瑤
馬 詩維・郭 仕瑩・喜馬佳也乃
卯田卓矢・松井圭介

本研究では鹿島神宮祭頭祭を事例に、社会情勢の変化における氏子集落の対応を明らかにする。鹿島神宮は初代神武天皇の時代に創建した神社であり、その由緒から武神として崇敬を集めた。神宮の祭礼の一つである祭頭祭においても、徴兵される男子の出立を祝うための「鹿島立ち」として、氏子集落によって今日まで存続されてきた。

氏子集落が存在する鹿嶋市・神栖市は戦後行われた「鹿島開発」により、急速な都市化・工業化が進み、住民の就業先などをはじめとして集落構造に様々な変化を及ぼした。これに人口流出や高齢化、経済不況が加わり、祭礼の人手不足・資金不足が氏子集落共通の課題となった。祭頭祭に不参加を決める集落が現れるなか、集落側では当番集落の垣根を越えて人員を集めるなどの対応が見られた。また、このような祭礼の維持・運営には集落組織の日常的な活動が不可欠であり、集落内の年中行事や町内会活動に対する積極的な活動が祭頭祭参加の一要因になると考えられる。

キーワード：都市祭礼、集落組織、鹿島神宮、祭頭祭、茨城県鹿行地域

I はじめに

I-1 研究背景・目的

『祭礼』とは柳田(1942)が提唱した語である。通常の『祭』との違いとして、柳田は規模の大きさ、毎年意匠を変え、見た目の豪華絢爛さを増加させる風流の存在、信仰を共有せずただ審美的な立場から祭事を鑑賞する見物人の存在を挙げている。これら祭礼、特に都市部で行われる『都市祭礼』は社会情勢の変化に対応する形で変容していった。

このような社会変化に対する都市祭礼の対応という視座を通して、都市社会学や民俗学では、女子や祭礼集団の領域外の子どもを新たに組み込み、祭礼自体が変容する過程を論じた武田(2016)や旧町外の住民や行政といった様々な「ヨソモノ」

が都市祭礼に与える影響を明らかにした金(2006)など、都市化やそれに伴う就業構造の変化によって担い手が集まらなくなった状況下における各主体の対応について論じている。

地理学でも、京都祇園祭の運営基盤を事例に人口変動への対応を考察した佐藤(2016)や都市機能衰退による祭礼の人手・資金不足に対する方策を明らかにした坂本ほか(2018)、烏山を事例に近世城下町における祭礼形態の変容を明らかにした渡辺(1999)が挙げられる。

祭礼の変容を町の機能的変化と結び付けた渡辺(1999)や都市化に対する祭礼運営の対応を考察した佐藤(2016)、外部人材導入の経緯を明らかにした坂本ほか(2018)のように、前述の既往研究では都市基盤の変化から都市祭礼の変容を検討している。それと同時に住民レベルの視点から都

市祭礼を追う必要がある。

地理学では、藤永（1999）が佐賀県脊振村鳥羽院における就業の変化が村落内の社会組織や祭礼に与える影響を論じている。また、卯田ほか（2013）は富山県入善町道市地区を事例に、講組織の維持形態を地区の社会構造から明らかにしている。地方都市の祭礼においても、運営・継承していく主体となる氏子集落の組織や就業変化を論じる必要がある。

以上を踏まえ、本研究では社会情勢の変化に伴う都市祭礼の変容と氏子集落の対応を明らかにすることを目的とする。研究対象地域は茨城県鹿嶋市に所在する鹿島神宮とその氏子集落である。

祭頭祭は鹿島神宮を中心に鹿嶋市・神栖市に存在する51の氏子集落を北郷・南郷に分け、卜定されたそれぞれの集落が当番集落として祭事を執り行う。祭頭祭当日では当番集落の囃人が煌びやかな衣装に身を包み、囃を唱えながら檜の棒を打ち付け、神宮前の参道を練り歩く。柳田（1942）が祭礼の特徴として挙げる規模の大きさには合致するものの、鹿嶋市からの直接的な支援は受けていない。また、祭事の運営に関しても氏子集落の住民が中心となって行っており、研究対象に適しているといえる。

研究方法として、Ⅰ-2とⅡでは郷土資料や聞き取り調査を基に対象地域である鹿嶋市と鹿島神宮及び祭頭祭の全体像を把握する。次いでⅢでは当番集落として祭頭祭に参加した清水集落・木滝集落の住民への聞き取り調査を基に、卜定から祭頭祭当日までの集落内での動きや当該集落内の社会組織とその担い手を明らかにする。一方、Ⅳでは当番を辞退した石神集落・棚木集落を対象に、祭頭祭を辞退した理由を集落内の社会組織とその活動から分析する。以上の情報を踏まえⅤでは、祭礼を取り巻く集落社会の変容に対する氏子集落の対応を考察する。

Ⅰ-2 研究対象地域概要

鹿島神宮の氏子地域がある鹿嶋市・神栖市両地域は茨城県の南東に位置し、東を鹿島灘、西を北

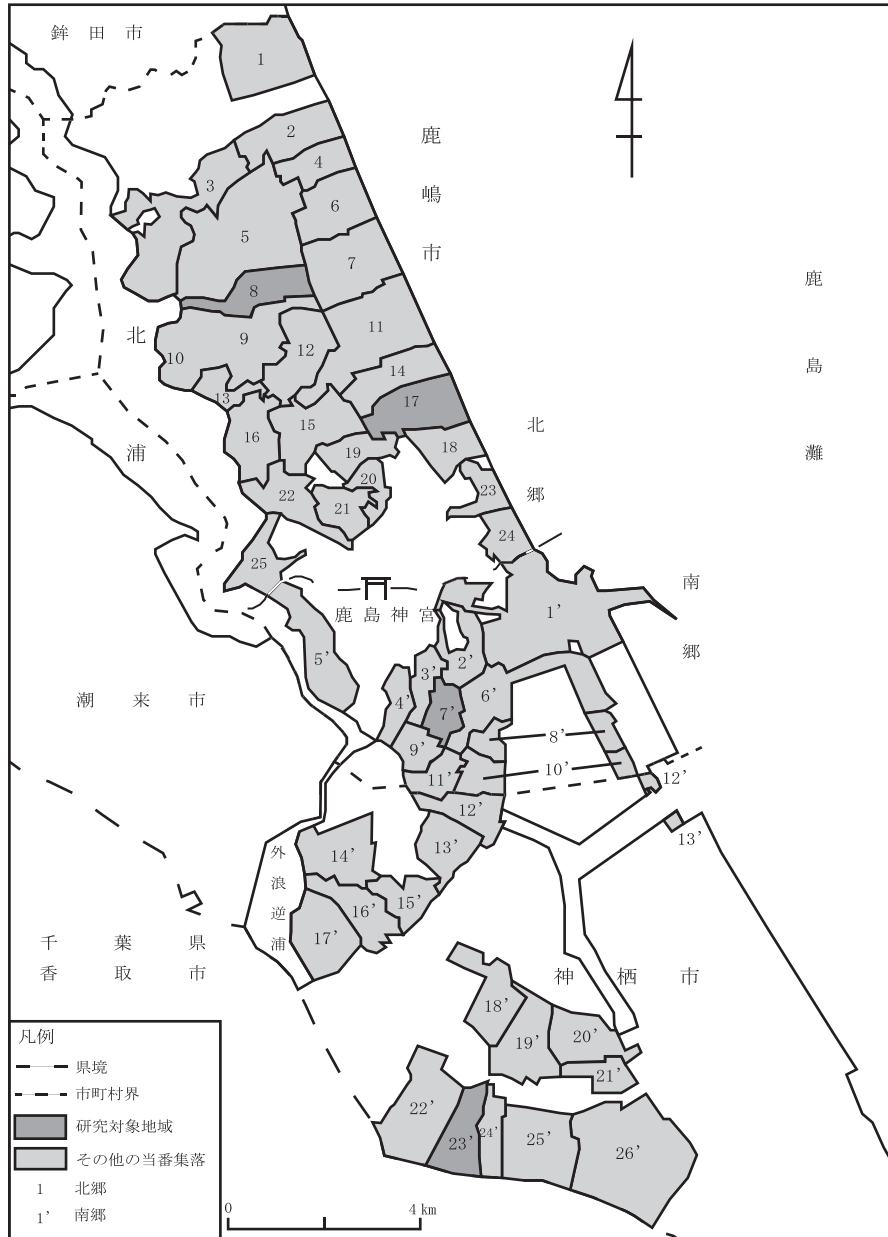
浦にはさまれている（第1図、第1表）。北部地域を30～40mの台地が、南部地域を平坦な砂丘地帯が占めている。また、交通面では鉄道網の整備が行き届いておらず、茨城県内の他市町村と比べて隔絶性の高い環境に置かれていた（茨城大学地域総合研究所、1974）。

このような状況の中、1959年に茨城県知事に就いた岩上二郎は1961年に「鹿島灘沿岸地域総合開発計画－臨海工業地帯造成計画」を策定した。マスタープランの中核に位置付けられた鹿島港は策定の翌年に試験堤が建設され、1963年に本工事が開始された。1969年に開港した鹿島港には住友金属（現日本製鉄）や鹿島石油等の重化学工業が進出し、鹿嶋市・神栖市をはじめとする鹿行地域は有数の工業地帯へと変貌した（茨城大学地域総合研究所、1974；財団法人鹿嶋市文化スポーツ振興事業団、2011）。

この開発によって鹿嶋市・神栖市、つまり鹿島神宮の氏子集落にあたる地域は地域外からの人口流入に加え、産業構造の変化にさらされた。第2図は現在の鹿島神宮氏子集落にあたる旧大野村・旧鹿島町・旧神栖町の総人口の変化を表したものである。増加の度合いに差はあるものの、3町村すべてにおいて開発前後で人口が増えている。

また、鹿島開発は人口の多寡に加えて住民の就業構造にも変化を及ぼした。第3図は鹿島神宮氏子集落における雇用者の変化を表したものである。いずれの地域でも就業者に占める雇用者の割合が増加しているのが見て取れる。特に大野村では1970年の1235人（23%）から、1990年には4322人（66%）まで増加している。さらに、第4図は3町村における農林業・建設業・製造業就業者数の変化を表したものである。いずれの地域も第一次産業（農林業）に就く人が減り、第二次産業（建設業・製造業）の就業者数が急増していることが見て取れる。

以上のことから、旧大野村・鹿島町・神栖町では鹿島開発によって人口が増加し、住民の離農、建設業・製造業等への就業が増えたことがわかる。次章以降、流入人口の増加や就業構造の変化が都



第1図 祭頭祭当番集落分布図

(祭頭灘保存会(2004)を一部改変して作成)

市祭礼の維持・運営にどのような変化を及ぼしたのかを明らかにしていく。

II 鹿島神宮の歴史

鹿島神宮は創建以来、鹿嶋市および周辺地域の多くの人々が聖地として頼り、鹿島の神の霊力を信じ、祈りを込めて祭事・行事が続いている。神

第1表 祭頭祭当番集落一覧

北郷		南郷	
1	大小志崎 だいしょうしざき	1'	平井 ひらい
2	浜津賀 はまつが	2'	鉢形 はちがた
3	津賀 つが	3'	佐田 さだ
4	荒井 あらい	4'	下埜 しもはなわ
5	和 なごみ	5'	大船津 おおふなつ
6	青塚 あおつか	6'	粟生 あおう
7	角折 つのおれ	7'	木滝 きたき
8	棚木 たなぎ	8'	国末 くにしえ
9	中 なか	9'	谷原 やわら
10	居合(※) いあい	10'	泉川 いずみがわ
11	荒野 こうや	11'	長栖 ながす
12	林 はやし	12'	居切 いぎり
13	奈良毛 ならげ	13'	深芝 ふかしば
14	小山 こやま	14'	下幡木 しもはたぎ
15	田ノ辺 たのべ	15'	平泉 ひらいずみ
16	沼尾 ぬまお	16'	筒井 つつい
17	清水 しみず	17'	賀 が
18	明石 あかし	18'	木崎 きさき
19	田谷 たや	19'	溝口 みぞぐち
20	猿田 さるだ	20'	奥野谷 おくのや
21	山ノ上 やまのうえ	21'	知手 して
22	須賀 すか	22'	高浜 たかはま
23	小宮作 こみやさく	23'	石神 いしがみ
24	下津 おりつ	24'	芝崎 しばさき
25	爪木 つまぎ	25'	萩原 はぎわら
	(※)中集落内に存在	26'	日川 につかわ

番号は第1図と共通、下線は聞き取り調査実施地域

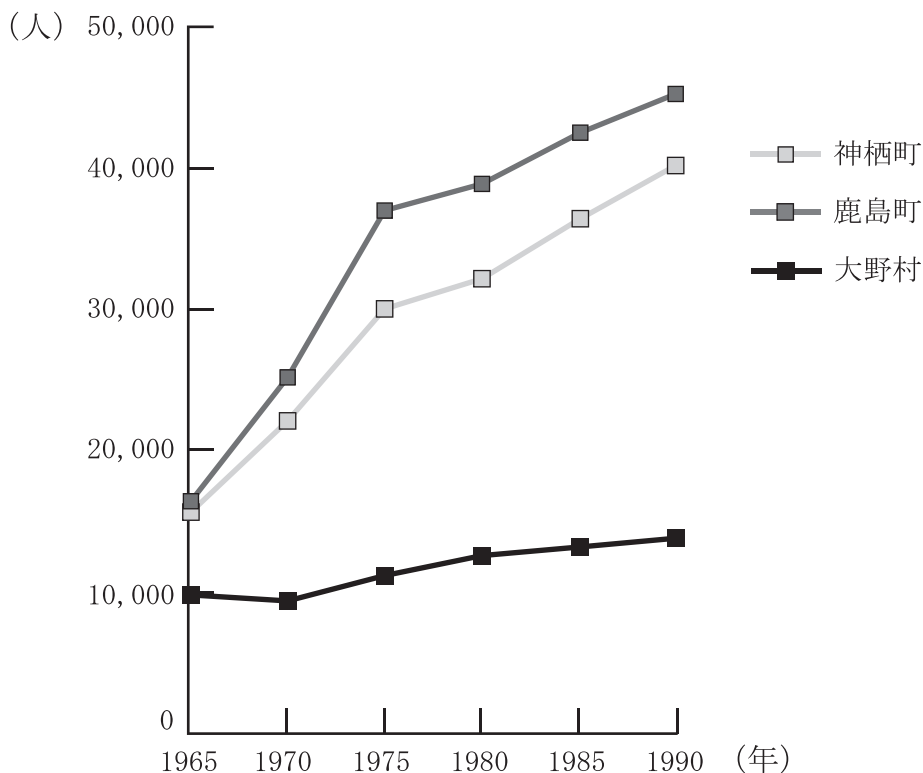
(祭頭囃保存会(2004)を一部改変して作成)

職をはじめ、氏子や信仰者たち地域に関わりある人が鹿島信仰を強く定着させている。本章では、鹿島神宮の信仰形態と組織について概観する。

II-1 鹿島神宮の歴史と鹿島信仰

鹿島神宮の祭神は武甕槌大神である。『古事記』

や『日本書紀』では、天照大御神の命により、国譲りを成功させ、天孫降臨の道筋を建てた武勲が記述されている(財団法人鹿嶋市文化スポーツ振興事業団, 2011)。神武天皇が東征の最中に陥った危機を武甕槌大神によって救われ、それに感謝した天皇が皇紀元年に大神を祀ったことが鹿島神



第2図 大野村・鹿島町・神栖町総人口推移

(国勢調査をもとに作成)

宮創建の由緒とされている。奈良・平安時代には国の守護神として信仰されるようになる他、中世から近世にかけて源頼朝や徳川家康などから崇拜されるなど、守り神・武神として信仰を集めた歴史を歩んでいる¹⁾。

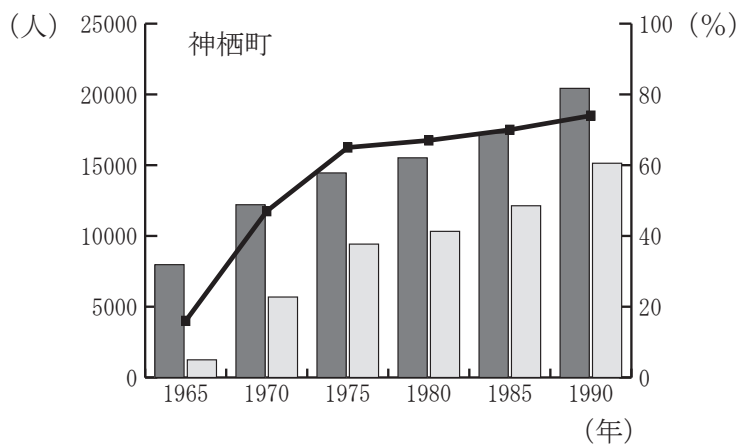
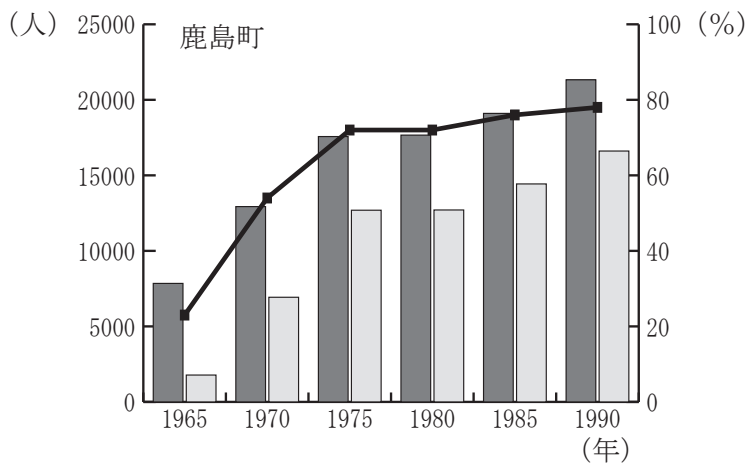
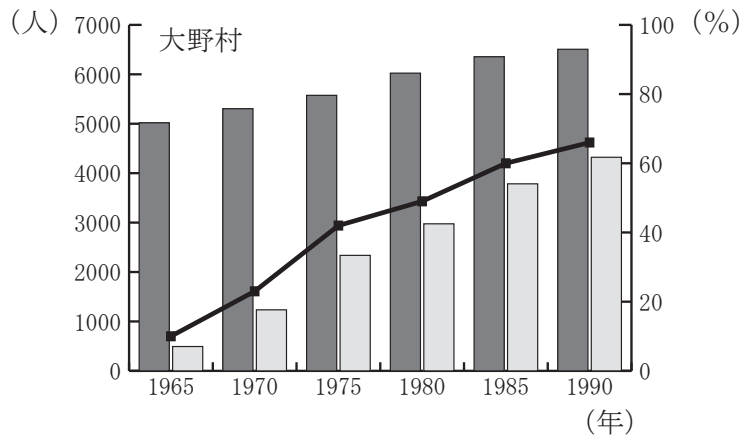
江戸時代には各地で鹿島信仰が普及し、要石信仰、鹿島踊り、鹿島人形、鹿島舟などの信仰が流行した。

要石信仰は災害の被害を除けるとされる信仰であり、現在も地元の人々から根強い信仰がある。2011年の東日本大震災では鹿島神宮周辺も揺れが大きかったにもかかわらず、鹿島灘における津波の死者はなく、神宮周辺の地域にも大きな被害がなかった。要石信仰を描いた絵図には、鹿島神宮の武甕槌大神をはじめとする神々が要石を用いて地震を起こす大鯨を封じる様子や、それを崇める民衆が描かれているものが多い。しかし中

には地震により潤う大工や職人もおり、そういった人々が逆に大鯨を崇めている絵図もある。

鹿島踊りは伊豆・熱海・九十九里などに伝わる災い・疫病除けの踊りである。この踊りは長らく途絶えていたが、2002年の式年祭を前に、地域の意識の高まりにより創作という形で復活することとなった。復活の中心となったのは宮中地区・鹿島地区の婦人と小学生を中心とした伝承の会である。これは民間の人々による活動である。復活した鹿島踊りは式年祭において奉納が行われた。

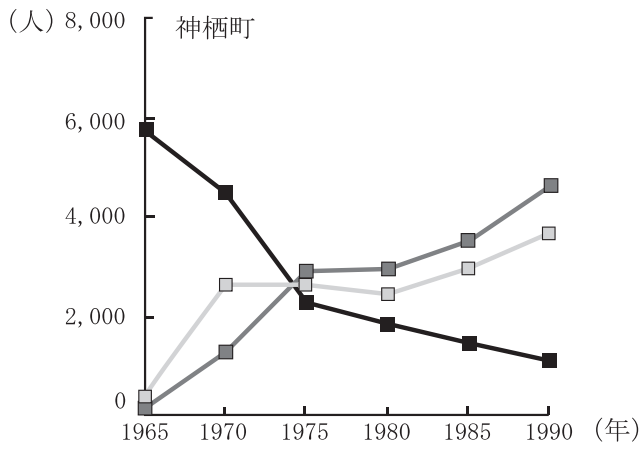
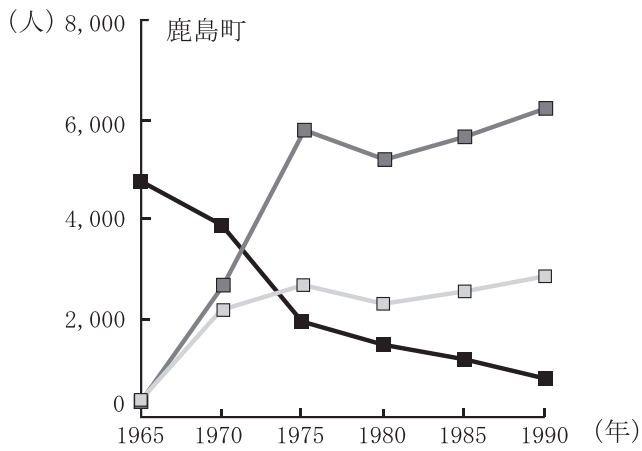
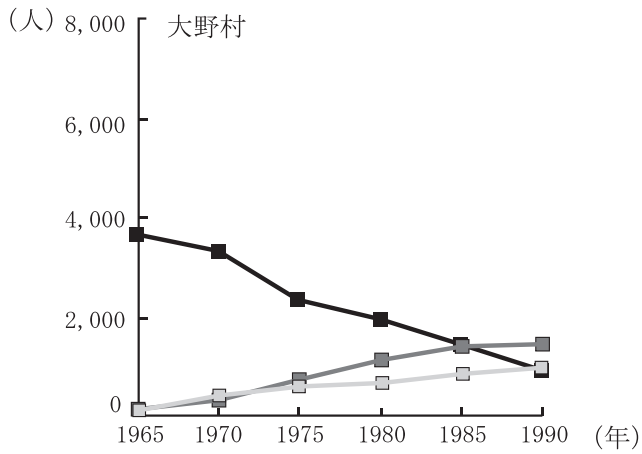
他に、武道(剣道・弓道)、鹿島開発、鹿島アントラーズというサッカー組織による参拝などがある。その中で、アントラーズの試合観戦を機会に神宮を訪れるパターンがあり、毎年10月に鹿嶋市で開催される「鹿嶋まつり」や鹿島神宮での節分祭など、地域イベントに選手やチームスタッフが参加している。また、2019年4月29日に鹿島



就業者総数
 雇用者総数
 雇用者比率

第3図 鹿島開発前後における就業者総数・雇用者総数・雇用者比率の変化

(国勢調査をもとに作成)



第4図 鹿島開発前後における農林業・建設業・製造業就業者数の変化

(国勢調査をもとに作成)

神宮弓道場で弓道大会が開催された。これらの活動は信仰を強める要素になっている。

また近年は御朱印を求めて訪れる者が増加している。これは趣味やスタンプラリー、流行としての意味が大きく、元々の信仰とは少し離れているようである。加えて、ここ20年ほどは境内の御手洗池で大寒頃に行く禊に参加する人が増加している。参加者は東京や九州からも訪れており、女性も多い。それに、参加者の6割がリピーターという特徴がある。関係者によると、物事に取り掛かる際に「鹿島立ち」の信仰心により禊を行い、その目的を達成できたお礼としてリピートを行うといった参加形態がみられるという。

II-2 神宮組織と参拝者について

鹿島神宮に奉仕する神職は宮司、権宮司、禰宜、権禰宜、出仕であり、並びに巫女、事務員、雇員、傭人、嘱託、事務補助などの奉務がある。但し、神職は宗教行事の奉仕者である。宮司は代表役員、権宮司は責任役員、禰宜2名、権禰宜1名で3名部長（総務部、祭儀部、管理部）とし以下神職、巫女、事務員、傭人など、勤務奉仕にあたる。

鹿島神宮組織の活動内容については、神宮御祭神の神徳宣揚と祭祀の厳修を第一と考え、宮司を中心にして社務に精励し、礼儀を重んじ常に浄妙正直の心を養い奉仕に勤める。鹿島神宮の役割については、神祇を斎祀し、儀式を行い、参拝者の供する設備であって、宗教法大法によって登記されているということがある。

鹿島神宮の氏子範囲は、かつては鹿嶋市、神栖市内の5,000世帯だったが、当地の人口増加に伴って、現在では約9,000世帯になっている。参拝者の範囲は鹿行地域をはじめ県内および関東地方、東北地方などの地域もみられ、最近では全国へと広がりつつある。

また、鹿島神宮の講組織も存在し、各地で講社が組織されるようになり、講社参拝が増加している。講組織は鹿島会、波崎講社、若松講社、矢田講社などがある。信仰組織についてみると、総代会、氏子委員会、敬神婦人ともえ会、氏子青年か

なめ会、鹿島神宮道場、弓道関係などが存在する。そして、崇敬者団体については、企業関係者、奉納関係者、競技関係者および一般参拝者などの団体がある。神宮関係者に対する聞き取り調査によると、総代会は鹿島神宮の役員によって構成され、神宮へ参拝者を誘引するため、具体的な対策を講じている。氏子委員会は各氏子地域の地区役員を中心に選出される。

鹿島神宮における信仰者の参拝行動は、一般参拝、正式参拝、特別参拝、本殿参拝（結婚式など）、祈祷殿参拝などの形態がある。そのうち、正式参拝は拝殿の手前で行う一般参拝に対し、参拝団体が殿内に上がり神職奉仕のもとで参拝する形態である。特別参拝は祭頭祭や御船祭といった祭礼活動を伴う参拝である。最近、個人を単位とする一般参拝が盛んになっており、特に正月やゴールデンウィークなどを中心に増加している。2019年の元日には約2,500件の祈祷があった。

第2表は昇殿祈願の祈祷内容を示したものである。鹿島神宮の祈祷内容は天下泰平、五穀豊穰、皇室弥栄、国家安泰、家内安全、安産、企業隆昌、初宮詣など約80種類がある。

II-3 鹿島神宮の年間行事

鹿島神宮では年間90を超える祭儀が行われ、御船祭や白馬祭、祭頭祭など特徴のある祭礼も数多く行われる。

その中で、御船祭は壮麗さと規模から鹿島神宮最大の祭典とされ、内海での御船祭としては最古最大の祭典であり、現在12年に一度執り行われている。この御船祭は今から約1700年前と推定される応神天皇の御代に祭典化されたという伝承があり、そのため祭の原形は応神天皇の母にあたる神功皇后による、いわゆる三韓征の故事に基づくとされている。直近の御船祭は2015年9月1日から3日斎行され、天皇陛下の勅使を迎えての例祭に続き、鹿島神宮の御祭神である武甕槌大神が約3,000人の大行列・約120艘の大船団と共に巡幸して香取神宮の御祭神である経津主大神と水上で出会った²⁾。

第2表 鹿島神宮における昇殿祈願の祈祷内容

皇室弥栄	神恩感謝	家内安全
交通安全	心願成就	除災招福
商売繁盛	企業隆昌	武道上達
道場安全	工事安全	職場安全
大漁満足	航海安全	五穀豊穰
旅行安全	合格	当選
安産	子宝	厄除
開運	健康	就職
初宮詣	七五三	立志式

(聞き取り調査をもとに作成)

祭頭祭は御船祭とともに鹿島神宮の祭礼の中でも規模が大きい固有の行事である(祭頭囃保存会, 2004)。鹿島神宮を境に南北に分布する51の氏子集落から卜定された2つの集落によって奉仕される。祭礼は一年を通して当番集落主導で行われ、多くの資金や人手、時間を要する。そのため、鹿嶋・神栖地域一帯の集落構造などの変容によって祭礼の運営形態にも変化を及ぼしている。

Ⅲ 祭頭祭参加集落における集落構造

本章では、祭頭祭当番集落の集落構造と地縁組織についてそれぞれどのような活動を行なっているかを整理し、また、卜定から祭頭祭を引き受けるまでの過程と祭事運営プロセスについて明らかにする。

Ⅲ-1 清水集落の事例

1) 集落構造・地縁組織

2017年の北郷の当番集落となった清水集落は、鹿島神宮の北約3キロに位置し、鹿島台地の中央部を縦断する鹿島臨海鉄道大洗鹿島線の東側から鹿島灘までの東西約2km、南北約1kmの地域である(第5図)。国道51号の西側に広がる鹿島台地には家屋が点在しているものの、主に田畑が広がっている。この台地や麓の山林から湧き出る湧水が「清水」の地名の由来であり、そのため畑作や漁業に加えて水稻栽培も行なわれていた(鹿嶋市史編さん委員会, 2005)。

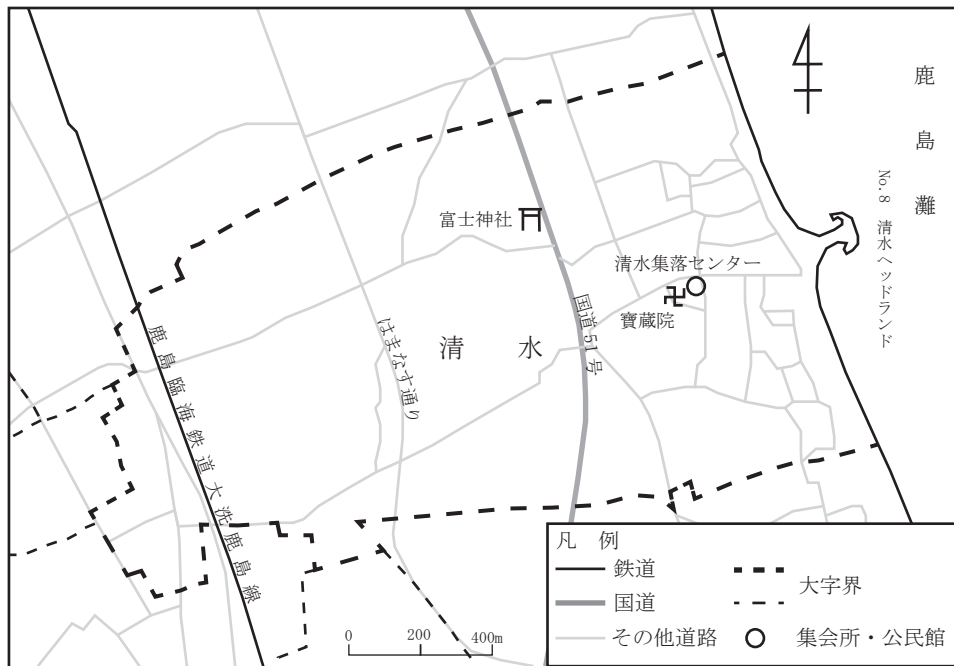
集落の中心は国道51号の東側で、波崎から続く

鹿島砂丘の延長線上の低地にある。集落内に寶蔵院(真言宗智山派)と集会所「清水集落センター」、国道沿いに富士神社が所在する。1889年の町村制施行により波野村になった後は、1954年に鹿嶋町、1995年に鹿嶋市と行政上の変遷を繰り返しつつ、現在に至っている(財団法人鹿嶋市文化スポーツ振興事業団, 2011)。

集落は南北に並ぶ4つの小字(共進、日の出、協和、第一)に基づいて組合が組織され、各40戸、総計約160戸で構成されている。

集落(区)の自治組織の役員は、区長1名(任期2年)、会計2名(任期2年)、各組合の組合長(任期1年)が各1名おり、組合長は年齢順で輪番制としている。区長は行政及び各集落との橋渡しとしての役割があり、定期的に鹿嶋市の区長会に出席している。また、各組合の下に4~5班あり、それぞれ班長がいる(第一組合は2班と3班が合併したため、計4班で組織されている)。協議委員(任期2年)は各組合から1名の計4名おり、次期の区長を誰にするか等、区内の問題やトラブルの話し合いを行っている。他、監事(または監査)(任期2年)が区で2名、集落センター長1名(任期2年)は区長が兼任し、集落センター長の下に集落センター運営委員(2名)がいる。

その他の役員として、檀徒総代1名(任期2年)と社司総代1名(任期2年)がいる。檀徒総代は年9回ほどの仏事を司っている。国道51号の西側に広がる土地に寺の所有地があり、国道建設の際、国に土地を一部買い上げてもらい、その時の買い上げ金(名義は寺社の財産)は、寺の許可により



第5図 清水集落概要図

区の資金として使用している。この資金管理を檀徒総代が行っている。社司総代は神社の管理を行うとともに、祭頭祭では降神祭、昇神祭など鹿島神宮とのやり取りを担当している。その他、毎年正月に集落内国道51号沿いにある富士神社の注連縄を掛ける仕事がある。

その他の地縁組織として、婦人会、子供会、シニアクラブがある。婦人会は公民館での盆踊りやソフトボール大会、運動会、波野祭、バレーボール大会の運営補助をしている。また、シニアクラブは主に寺の清掃活動を行っている。

また、体育委員はソフトボール大会やバレーボール大会、毎年10月に行われる旧波野村域の地区対抗運動会の選手選抜及び参加依頼を行っている。その他、清水リサイクル会計（1名）、消防団の活動があり、それぞれ区の役員として1名ずつ選出されている。

集落の行事として海岸清掃（通常清掃含む）は年3回行われている。参加者は有志で、当日は所属組合に拘らず三班に別れてゴミ拾いをする。サーファーが協力してくれることもある。また、

富士神社の祭礼は毎年秋（旧暦に基づいているため、開催日は年によって異なる）に開催されているが、現在は区の役員だけで執り行っている。市民運動会は毎年10月に旧波野村域の下津・小宮作・仲作・清水・明石・神向寺6地区対抗の形で開催され、大いに盛り上がる。また、各組合で行われる常会（定例会）では、組合長を通して、区の決定事項を連絡している。かつては毎月一回行われていたが、現在は年3回に減少している。

2) 祭頭祭の運営プロセス

祭頭祭の当番集落の候補集落には当番になる2年前から鹿島神宮から声が掛かる。卜定では4つの集落から2つが選ばれ、春季祭には役員で参加する事になる。

第5表は清水集落における祭頭祭の年間行事日程である。清水集落は2016年春季祭の卜定で2017年の当番集落に選定された後、当時の区長は会計担当者2名と相談した。過去に海岸沿いの北郷集落で辞退したことが無かったことや、また辞退した場合、次回まで40年以上年月が開くことで経験

第3表 清水集落における自治組織

役職	任期	定員
区長（集落センター長兼任）	2年	1人
会計	2年	2人
組合長	1年	1人
班長	2年	各組合に4～5班，各班1人
協議委員	2年	各組合から1人，計4人
監事（監査）	2年	2人
檀徒総代	2年	1人
社寺総代	2年	1人
集落センター運営委員		2人

（聞き取り調査をもとに作成）

者がいなくなり、継承が難しくなることを懸念し、辞退できないと結論付けた。その後、集落センターに歴代区長を集め相談し賛同を取り付け、3月末に臨時総会を開催し役員の見解を聞いた。

前回の祭頭祭では「さしわり」という、各戸に割り当てられた寄付金が5万円と高額であることや、衣装も自費で賄うと各世帯の経済的な負担が10万円～15万円と非常に大きくなることに対する反対意見がでた。また前回の寄付金の剰余金を当時の祭頭祭役員が飲食に使ってしまったという噂から祭頭祭参加への反対意見を表明する者もいた。臨時総会場で参加者の多数決で賛否を問う意見もあったが、その場では採決せず、各組合に持ち帰って意見を聞くこととした。その際、区長から祭頭祭参加への積極的な熱意を伝えると共に、それを文章にして組合員の説得にあたること

となった。各組合に持ち帰り組長が説得にあたった結果、日の出、協和では反対意見は出ず、第一では希望者で行うことで話がまとまった。協和では多数決が民主的ということで賛否を取ったところ40票中3票の住民が反対だった。4月の総会で各組合長から結果を発表してもらったところ、反対の3票の住民も最終的に賛成に回り、清水集落の総意として祭頭祭に参加することが決定された。

祭頭祭参加へ組合員を説得する為の対策として、1) 金銭管理を適切に行い、飲食は祭事や全員が認めた集まりの時のみとし、無駄な支出をしないこととした。2) 各個人の経済的負担を軽減する為、「さしわり」を廃止し、一軒一律3万円とした。また、経済的状況に応じて、それより少額の寄付を可能とした。3) 祭頭祭の剰余金は

第4表 清水集落における年中行事

行事	開催時期
注連縄結び（富士神社）	1月
ソフトボール大会	初夏
旧波野村城市民運動会	10月
富士神社祭礼	秋
バレーボール大会	秋
海岸清掃	年3回
常会（定例会）	各組合ごとに実施，年3回

（聞き取り調査をもとに作成）

第5表 清水集落における祭頭祭年間行事日程

2016年3月9日	春季祭にて当番集落に卜定
4月10日	役員総会にて奉納を決定
4月30日	差符状交付式
5月8日	祭事総会設立
5月14日	大豊竹奉納者決定
6月26日	降神祭・祭事事務所開所式
7月1日	芳名板設置
7月2日	大豊竹注連縄掛け
8月～9月	祭頭囃練習
10～12月	祭頭囃練習
11月13日	大総督家注連縄掛け・結納
12月15日	楽士保存会と道具・人員について調整・契約
2017年1月	祭頭囃練習
1月12日	大総督初参拝
1月28日	棒揃え・第1回廻祭頭
2月5日	寄進振舞
2月19日	第2回廻祭頭
	大総督家 香取神宮奉納
2月26日	大豊竹奉納式
3月4日	昇神祭
3月9日	祭頭祭奉納
4月23日	芳名板取り外し及び掲示板解体
5月5日	大総督注連外しの儀
6月11日	神宮へ衣装・道具の返還
7月2日	祭事事務所閉所式

(聞き取り調査をもとに作成)

役員個人の飲食に使用せず、区の共益費とすること、以上の3点を講じた。

上記の取り決め以外にも、清水集落が祭頭祭を引き受ける決定に至った要因として、運動会を始め集落内外の行事に積極的に参加している人が多いことや、助(すけ)祭頭という、他の集落が当

番の祭頭囃にも応援に行くような太鼓叩きが集落内に複数存在していたこと、また独特の祭頭囃をあげるなど、「祭頭じょうずの清水郷」と鹿島神宮から称されるほど集落内に祭好きな人が多かったことなどが挙げられる。加えて、過去に祭頭祭当番を行った近隣の集落からの引き継ぎ資料が存

在したことも、祭頭祭運営の大きな助けになったとの事であった。一方、鹿島開発によるサラリーマンの増加が必ずしも参加を阻害する要因になったわけではないとのことであった。

区長は祭頭祭の祭事委員長を決めるに当たり、区の役員会に諮ったところ、他の役員からM氏が祭事委員長をやられた方が良いのではないかと意見が出たため、本人が引き受けた。ただ、小宮作など他の集落では前年区長をしたものが祭事委員長を引き受けるルールを決めているところもあるという。

また祭頭祭の主要な祭事役員の選出に当たっては、まず区長と会計が相談し、教師、市役所職員、消防署職員、企業の管理職経験者など職務経歴を重視して決めたのち、候補者の説得にあたっていたとのこと、組織運営能力や財務管理能力を重視している。必ずしも区長経験者が祭事委員会役員を兼任していたわけではない。また、他の役員（総勢70人程度）を選ぶにあたり、各組合から何人だして欲しいという形で下ろしたという。これは祭頭祭の婦人会・子供会などの役職を、なるべく各組合に平等に人数を割り振ると共に、多くの人に役員になってもらい主体的に活動に関わってもらう意図があった。加えて、お互い知らない者同士が作業に関わることで交流が生じ、親睦を促す効果もあったという。

懸案の一つであった祭頭囃子の人集めに関しては、清水集落から他地区に嫁入りした人に声を掛け参加を募ったほか、近隣の小中学校にも祭頭囃いで学校を休む子供に対して公休扱いにするよう協力依頼を行った。清水集落の子供達が同じ学校の集落外の友人を連れてくるなど、予想以上に多くの囃子手が集まった。また、その際の参加費（寄付）は任意で依頼した。

Ⅲ-2 木滝集落の事例

1) 集落構造・地縁組織

2019年の南郷の当番集落となった木滝集落は鹿島神宮の南約3kmに位置し、国道124号線が集落内を縦貫し、主にその東側を中心に南北約1.4km、

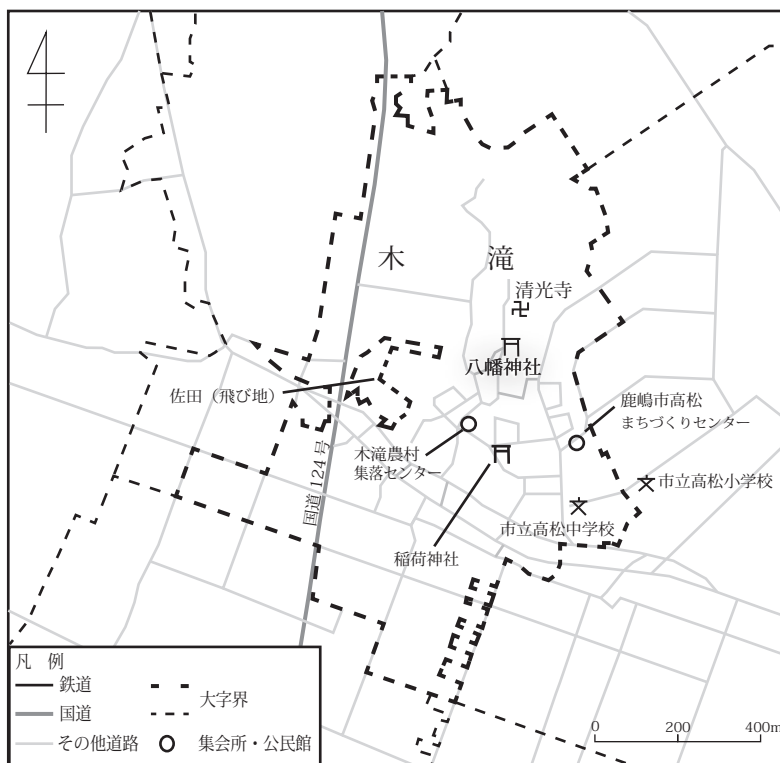
東西約1kmに広がる地域である（第6図）。区域は鹿島台地の南端部にあり、台地と谷が入り組んだ地形をしている。台地部（本郷台地）には先土器時代から近世まで継続的に集落跡のある国神遺跡や縄文中期の木滝貝塚がある。また、弥生時代後期から古墳時代前期の木滝台遺跡、たたら製鉄跡である比屋久内遺跡があり、古くから人が定住していたことが見て取れる（鹿嶋市史編さん委員会、2005）。

木滝の名の起りは定かでないが、山藤の咲く様子があたかも木の間に流れる滝のようであったことから名前が付いたという説や、古代に製鉄所があり、木材や木炭を燃やしていたことから、「木を焚く」から「キタキ」になったという説など諸説ある。また、木滝氏という代々鹿島社の総追捕使の職を勤めていた家系があるが、遅くとも15世紀後半には既に存在していたことが文献から確認できる（鹿嶋市史編さん委員会、2005）。

1889年の町村制により、木滝周辺の10村落が合併して鹿島郡高松村となった。木滝集落には高松村役場があり、中心地として栄えた。また旧飯沼街道沿いには役場や郵便局のほか、旅館、商家、酒屋、映画館、芝居小屋が軒を連ね宿場町の様を呈し、馬車や乗り合いバスの停留所が設置されるなど交通の要衝であった。1954年に高松村は周辺の町村と合併し消滅し、鹿島町に編入された（財団法人鹿嶋市文化スポーツ振興事業団、2011）。

集落内の寺社は稲荷神社、清光寺（真言宗豊山派）等がある。また、集会所「木滝農村集落センター」の他に公民館「高松まちづくりセンター」、教育機関としては高松中学校、隣接して高松小学校（所在地は粟生）が存在する。

集落（区）の自治組織の役員は、まず区長経験者による社寺総代が3名（任期3年）、その下に区長1名（任期1年）、副区長1名（任期1年）がいる。副区長は次期区長候補として推薦されており、1年掛けて区長になる準備をする。また集落は6つの組で構成されており、それぞれ組長（輪番制；任期1年）が各組1名計6名いる。その他、集落センター運営委員2名（任期2年）がいる（第



第6図 木滝集落概要図

6表)。区長人事に関しては、歴代の区長経験者が予め適任者を選定し、最終的には区の役員会にて役員の手挙で決定される。区長に必要な要素としては、人徳学力に加え、PCでの作業能力や文章作成能力、その他職務経歴など能力に応じて選ばれている。区長の業務内容は幅広く、区内の困りごとを市に上げる事などを担当している。

その他の集落組織として、消防団や子供クラブ・育成会などがある。旧高松村地域での盆踊りや高

松住民体育大会、公民館まつり（11月第3週開催）の人集めと運営を行っている。百寿会は年二回開催される老人会で輪投げ、カラオケ、高松カルタ、茶話会を行っている。稲荷山清光寺には檀家組織があり、戦没者慰霊祭（8月15日）、鳥追い（年初の第一日曜）がある。稲荷神社例祭（2月）と八幡神社例祭（旧暦8月15日）は、集落の二大祭として組内回り当番で行われている。講組織は自然消滅したため、現存しない（第7表）。

第6表 木滝集落における自治組織

役職	任期	定員
社寺総代	3年	3人
区長	1年	1人
副区長	1年	1人
組長	1年	各組1人（計6人）
集落センター運営委員	2年	2人

（聞き取り調査をもとに作成）

第7表 木滝集落における年中行事

行事	開催時期
鳥追い	1月最初の日曜日
たかまつカルタ大会	1月
成人男女ソフトボール大会	夏季
盆踊り大会	7月最終土曜日
戦没者慰霊祭	8月15日
八幡神社祭礼	旧暦8月15日
たかまつ住民体育大会	10月
高松公民館まつり	11月第3週
稲荷神社境内かがり火	12月
百寿会（老人会）	年2回

（記念誌委員会（2008）および聞き取り調査をもとに作成）

2) 祭頭祭の運営プロセス

卜定により木滝集落が当番集落に決まる前より、当時の区長、副区長から祭頭祭当番集落になった際には元歴史教師のS氏に祭事委員長になって欲しいと依頼していた。祭頭祭の当番集落に決まると、S氏は祭事委員長の職を引き受け、祭頭祭参加の可否を住民に問う為、非公開を前提に全83戸にアンケートを取った。否定的な意見は3割程あり、主な理由は経済的な負担と、年間を通して行われる練習や祭事に参加する労務負担であった。また、上記に加え、前回の祭頭祭で役員が剰余金を飲食に使用したことがあり、その事を知る年配者から反対意見があった。

これらのことから以下のルールを定め住民の説得に当たった。1) 奈良毛集落など「さしわり」を廃止した地区を参考に「さしわり」を撤廃した。2) 祭頭祭の剰余金は、役員などの飲食などには決して使用しないことを確約すると共に、集落の共益費として使用することとした。具体的には神社の修繕費として使用すると共に、残金は特別会計として通帳を作り、次回の祭頭祭の活動資金として手を付けないでおくこととした。これは鹿島神宮からの寄付金500万円の入金が入金が7月であり、祭頭祭保存会からの寄付金200万円の入金が入金が12月と、活動の初期は役員の活動資金が無い為、社寺会計から200万円を借りた経緯があった。

祭事委員会役員の選出にあたり、過去二回の祭

頭祭経験者として年配の経験者を顧問（3名）として迎え、相談役（4名）は祭頭祭の行進に参加してもらった形とした。祭事委員長（1名）、副委員長（5名）の中に前区長、会計（2名）に前副区長（現区長）が含まれていた。書記（2名）までを区長経験者が役を担った。その他、監査（2名）、幹事14名、専門部委員（総務部9名、衣装部5名、用具部6名、女性部（子供部）10名）総勢30名、委員42名。祭頭祭の役員に関しては、適材適所で候補者を選び、一名一名依頼している。全83戸の集落で105名が役員、委員に任命されている。これは当事者を増やし、集落の力を一致団結させる狙いがあった。

また、祭頭祭当日の日程が3月9日土曜日であることから、地元の小中一貫校、高松小中学校に祭頭祭へ参加するよう協力要請し、その結果「高松元気プロジェクト」の一環として高松地区全体の祭頭祭として臨むことができるようになった。これにより、懸案事項であった囃子の人手不足を補うと共に、若い担い手の育成とふるさと教育の実践を同時に行うことができるようになった。祭事委員長のS氏はこのやり方を木滝方式と名付け、祭頭祭の神事を3月9日に固定し、一方、祭事はその直後の週末に日程を固定する改革案を鹿島神宮及び保存会に提案した。

その他の懸案事項として、大豊竹の選定があった。これは地区の中から真っ直ぐに伸びた形の良い竹を選び注連縄を掛ける大豊竹注連縄祭に奉納

する竹の選定である。竹林は地区内に多くあったが、費用を負担できる奉納者を見つけるのが難しかった。幸い神栖市で和菓子の製造販売を営む人物に引き受けて貰えることになった。

さらに祭頭囃の中心的な役割を担う、地区内の5歳前後の男の子が毎年選ばれる大総督が中々決まらなかった。これも鹿嶋市の医院経営者の孫を大総督にしたい旨の申し出があり解決した。大総督の正式決定を祝う注連掛け神事と結納の儀が挙行されたのは10月末の28日であった（第8表）。

IV 祭頭祭不参加集落における集落構造

本章では、石神・柵木集落を事例に、祭頭祭に参加できなかった集落の構造・地縁組織に加え、祭頭祭を辞退するに至った経緯を整理する。

IV-1 石神集落の事例

1) 集落構造・地縁組織

石神集落は神栖市の北西部、常陸利根川に面した集落である（第7図）。標高5mに満たない低平な地勢であり、稲作の他、菜種の栽培が比較的盛んに行なわれていた。中世は石神氏が一帯を治めており、高浜集落にあった津を知行していた。檀那寺でもある花光院（真言宗智山派）のあたりには「御城」という小字が残っていることから、石神氏の居館があったとされている（神栖町史編さん委員会、1988）。

1884年に周辺9ヶ村と合併し、軽野村として村政を敷くと、1955年に息栖村と合併し神栖村となっている。神栖村はその後、開発による人口増を受けて1970年に町制を施行、2005年に波崎町と合併し神栖市へと改組している。

石神集落では区と組という自治組織が存在し、様々な活動が行われている。聞き取り調査によると、区の下には浜町・丘西・丘東という三つの組があり、石神集落の組は班と同じものである（第8図）。

区の代表である区長は1名であり、任期は1年である。区長は選挙で決め、その際に各世帯の若

頭が世帯を代表し票を入れる。区長の役割は主に役場からの配布物をその下にある組長にそれぞれ配布することである。石神集落には副区長がいない。それは現状において副区長の機能が大きくないことと、副区長がいれば住民の出費が必要になるためである。

石神集落における組は班と同じであり、下部組織は設けられていない。組長は輪番制で浜町・丘西・丘東という三つの組からそれぞれ1名選出され、合計3名である。任期は1年である。

石神集落には消防団・子供会は今もあるにはあるが（第9表）、活動にはあまり積極的ではない傾向が見られる。婦人会はすでに10年ぐらい前から見られなくなった。聞き取り調査によると、婦人会が消滅した最も大きな要因は女性の社会進出が加速し、多忙のため余暇の時間が減少したことにあるといわれている。生産組合は水を汲み上げる日時決定といった農業に関する取り決めを行う組織である。生産組合の集会は年に1回開催する。組合長が1名いて、その下に部下が1名つき、合計2人で構成される。かつて、組合長は浜町・丘西・丘東の3組からそれぞれ1名が選出され、合計3名いたが、現在は1名しか選出されていない。組合長は輪番制で各組から選出する。聞き取り調査によれば、その変化の主な原因はデータ記録方法の進歩である。かつては全ての作業内容を手書きで行っていたが、今はパソコンでの入力へ変化していき効率が大幅に向上し、必要とする役員数も減った。それに加えて、区長も区のほうが終わったら生産組合の仕事に協力するため、多くの人員を必要としなくなったためである。老人会も既に消滅しているが、その代わりに老人会の機能を有する庚申講という講組織がある。庚申講は約2か月に1度の頻度で行われ、飲み屋で催される。近年、浜町で80歳以上の高齢者が近所の5、6人で集まり不定期でお茶講を開催している。庚申講の形成は高齢化の進行と比例していると想定される。

第8表 木滝集落における祭頭祭年間行事日程

2018年3月9日	春季祭にて当番集落に卜定
5月6日	差符状交付式
6月23日	降神式
7月1日	寄進者芳名板設置
7月14日	楽士保存会と道具・人員について契約
7月16日	大豊竹に至る山道の刈り払い作業実施
7月21日	大豊竹注連掛け
8月29日	高松小・中学校へ協力要請
10月21日	祭頭囃練習
10月28日	大総督正式決定，注連掛け神事と結納の儀挙行
11月4日	祭頭囃練習
11月11日	祭頭囃練習
11月18日	高松公民館まつりにて囃披露
12月16日	祭頭囃練習
2019年1月14日	大総督初参拝
1月27日	寄進振舞
2月9日	大豊竹奉納式
2月24日	棒揃え・廻祭頭実施
3月2日	昇神祭
3月9日	祭頭祭奉納
5月19日	大総督注連外しの儀
5月28日	神宮へ道具の返還
6月16日（予定）	芳名板取り外し及び掲示板解体
6月23日（予定）	祭事事務所閉所式

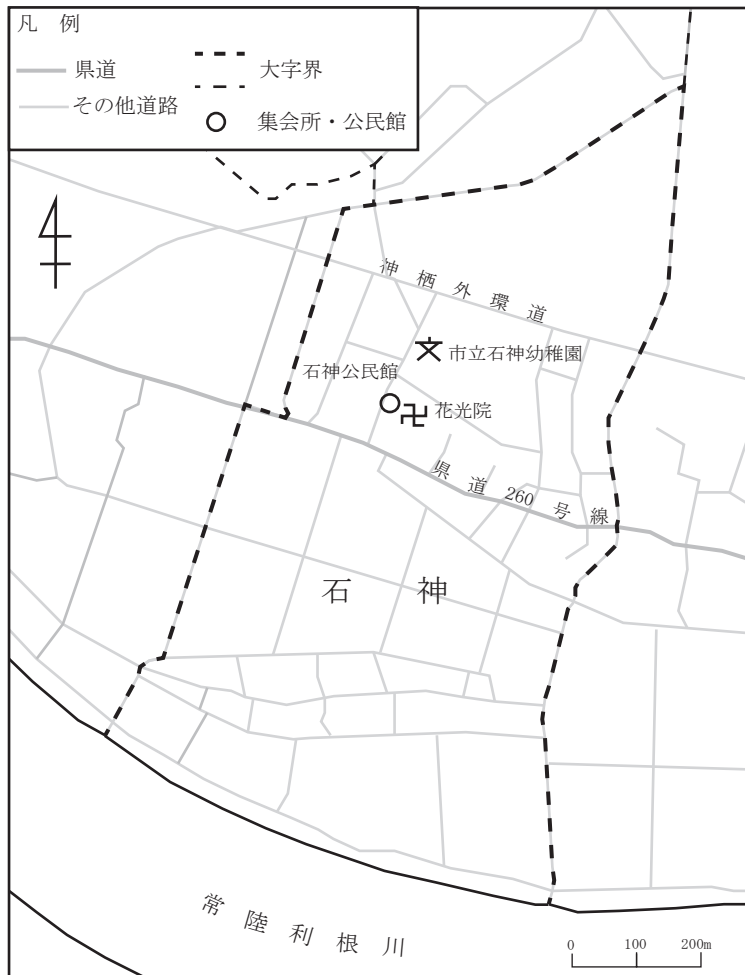
（聞き取り調査をもとに作成）

2) 不参加に至った経緯

3月9日の卜定後、集落の中心人物が祭頭祭について話し合った後、石神の全世帯主を集めた会合を開き、「祭頭祭に参加できるか、できないか」

という質問を設けたアンケート調査を行った。そこで、反対票が多かったために不参加を決定した。

不参加に至った主な要因は経済的負担である。祭頭祭を行うには膨大な資金が必要とされるた



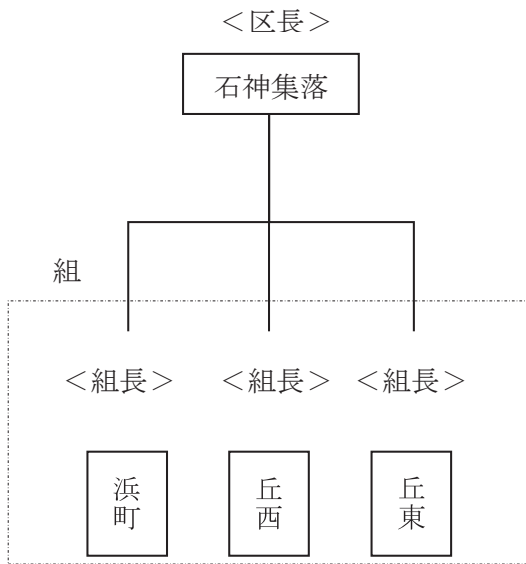
第7図 石神集落概要図

め、住民がそれに対して不満をもっている。加えて、会社勤めの住民は時間が取れないということもその原因の一つとされている。かつて石神ではほとんどが農家であったが、開発後次男・三男が働きに出るようになると、集落内の行事に割く時間が無くなり、イベントが行われなくなった。

以前、住民は皆農業を営んでいた。住民たちが何人も集まり、田圃に入っている話しかたり、休憩時間に一緒に食事をするという通じて集落の輪が自然にできていた。しかし、今は地区内住民の就業構造が多様化したこともあって、住民たちが一緒に集まる機会も共通する話題も少なくなっているために集落の「輪」が少しず

つ崩れている。つまり、地域住民が団結して行事を行う精神的な支えがなくなってきたと考えられている。

また、終戦後の貧しい時代は派手な衣装を着ず、役員だけが手叩き祭頭をやっていた集落があった。20年前は、石神も囃はせず大豊竹のみを鹿島神宮に奉納していた。その手法を続けていきたいと考える集落がある一方で、現在は鹿島神宮や祭頭囃保存会も補助金を出し、衣装や道具なども神宮や保存会から貸し出され、祭頭囃を行う条件が揃っている。しかし、補助金や衣装・道具の貸与を考慮しても、多額の金銭的負担が集落住民の祭頭祭への参加を消極的なものにしたと考えられ



第8図 石神集落における集落構造
(聞き取り調査をもとに作成)

る。加えて、5、6人で手叩きをやるだけならたくさんのお客も納得できないのではないかとこの配慮もあり、中途半端な祭を行うくらいならば辞めたほうがいいという理由で祭頭祭不参加を決定したという証言もあった。

Ⅳ-2 柵木集落の事例

1) 集落構造・地縁組織

柵木集落は北浦沿岸の台地上に位置する集落である(第9図)。産業としては稲作、豊富な山林を活かした林業の他、一時期は養蚕や甘藷栽培も

盛んに行なわれていた。また、銚子・佐原・土浦を結ぶ水上輸送拠点の一つでもあった(鹿嶋市史編さん委員会、2005)。

集落内の神社は應神社(鎮守)、水神社、弁天社がある。柵木集落の檀那寺は大福寺(真言宗豊山派)であるが、住職は南隣にある中集落の寶幢院の住職が兼務している。行政上の変遷では、1889年に大同村に編入、1955年に中野村と合併し大野村へと改組している(財団法人鹿嶋市文化スポーツ振興事業団、2011)。

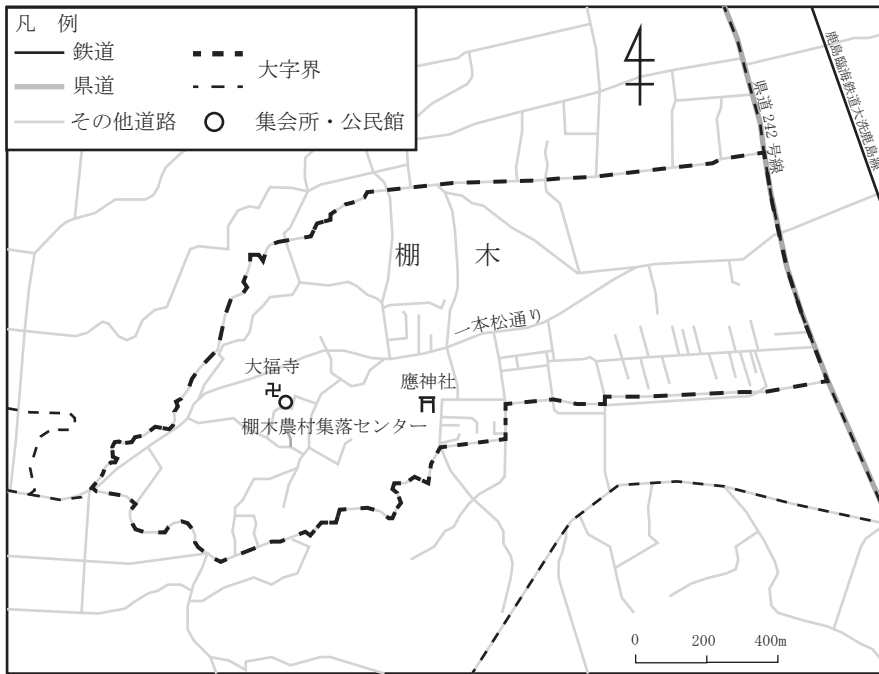
柵木集落では集落の代表として、区長の代わりに行政委員が1名いる(第10図)。選出方法は年功序列制であり、任期は2年である。行政委員は市と集落の掛け橋としての役割を担い、市からの回覧物の配布、下部組織の代表者との連絡、集落センターの活動などを行う。下部組織について、柵木集落が上組と下組という2つの組に分かれており、上組内には2つの班、下組には一つの班が存在する。班の代表が各組の組長となる。また、集落には檀家総代と社寺総代が1名ずつおり、任期が3年である。加えて、会計も1名設置されている。

集落には老人会(長生会)、消防団、育成会、お茶講が存在する(第10表)。かつて婦人会も存在したが、平成が始まったころに廃止されたという。各組織の主な活動として、老人会(長生会)は毎週水曜日や木曜日に、集落センターの前でゲートボールをし、育成会は町内の掃除を担当する。また、お茶講は月一回集まって茶話会を行い、カラオケなどをする。

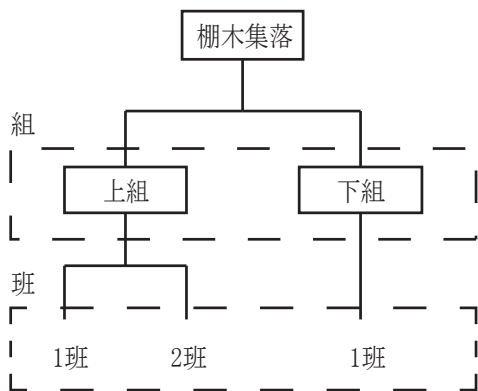
第9表 石神集落における自治組織

組織	存続状況	活動内容
消防団	○	
子供会	○	
婦人会	×	
生産組合	○	農業関係の取り決め
老人会	×	
庚申講	○	茶話会

(聞き取り調査をもとに作成)



第9図 棚木集落概要図



第10図 棚木集落における集落構造
(聞き取り調査をもとに作成)

さらに、毎年10月に旧大野村に属する27の大字全体で地域対抗の運動会が開催されている。運動会の際には、各集落から選出された代表者によって構成された実行委員会があり、各集落の区長、スポーツ推進会などと協力し、運動会の運営をしている。しかしながら、ここ2年は大雨のため開催中止となった。

2) 不参加に至った経緯

昨年度、棚木集落は当番集落に選ばれたが、当時の行政委員と集落の代表者たちと議論した結果、祭頭祭に参加しないことになった。その理由として3つの点が挙げられる。

第一に、棚木集落において60歳過ぎの独身者が多い他子供も少なく、新住民もほぼ組合に入っていないため、資金・人手不足の問題が深刻であること。第二に、老人会や消防団、育成会などの地縁組織は存在しているが、組織活動が停滞するため、住民たちの交流機会が少ない、地域のつながりが希薄化していること。第三に、農業に従事する人が住民の大多数を占めており、企業で管理職や役員に就く人がほぼないため、住民の中では控えめな人が多く、リーダーとなって指揮を執る人がいなかったことが挙げられる。

V 鹿行地域における都市祭礼の維持・運営

本章ではⅢおよびⅣで述べた祭頭祭参加集落の祭礼運営形態や不参加集落の現況を踏まえ、社会

第10表 柵木集落における自治組織

組織	存続状況	備考
老人会	○	毎週水・木曜日にゲートボールを実施
消防団	○	
育成会	○	町内の清掃を担当
お茶講	○	月1回茶話会の開催
婦人会	×	
青年団	×	
生産組合	×	

(聞き取り調査をもとに作成)

情勢が移り変わる今日において、都市祭礼を担う集落住民がとった対応と、祭礼の参加要因を考察する。

前述のとおり、鹿嶋市・神栖市は昭和30～40年代にかけて行われた鹿島開発によって都市化・工業化が急激に進展し、農村・漁村であった当該地域は工場労働者をはじめとする勤め人が住む町へと変容した。新しい住民の流入はもとより、従来の地域住民も農業をやめて、あるいは農家の次男・三男が開発によって進出した企業に働きに出るようになった。そのため、集落内にとどまる男手が少なくなり、祭礼を運営するにあたって人手が足りなくなる課題が表出した。この課題は開発当初から現在に至るまで残っており、本研究で聞き取りを実施した清水・木滝両集落とも農家の減少と集落外への勤め人の増加を挙げている。

このような状況において、30年以上前から解禁されていた囃し手としての女性参加の他に、清水集落では集落から転出した親戚や友人に協力を仰ぎ、人手を確保した。また、木滝では当該集落では初めてとなる助祭頭を依頼した他、集落内にある高松中学校、隣接する栗生の高松小学校の生徒を囃し手として参加させるなどして人手を確保した。

また、祭頭祭運営については資金の課題も山積している。かつては祭頭祭の当番集落に卜定されることは名誉とされ、資金調達においても各家庭から一律で寄付金を募る他、衣装は自前で調達したりするなど、集落や家庭によらず積極的に費用を捻出していた。現在は以前ほど高額な寄付金を

工面できる家庭が少なくなったことから、清水集落では一律10万円だった寄進を3万円へと引き下げ、場合によってはそれ以下の金額での寄進も可とするなどの対応を取った。木滝集落では祭事委員会で寄付金の下限を設けずに徴収を行った。

資金面の対策においては、当番集落以外からの働きかけもあった。毎年鹿島神宮から各当番集落に対して200万円³⁾、祭頭囃保存会からは300万円の寄進が行われている他、かつては自前で用意していた衣装や道具も祭頭囃保存会から貸し出されたものを充てるなど資金・物資不足の対策が取られている。

上記の人員や資金・物資は祭頭祭に限らず祭礼を行う上で最重要な課題であり、清水・木滝でもそれぞれ対応がみられた。ここではさらに指揮を執る有力人物の存在を祭頭祭の参加を決定づける要素として指摘できる。清水集落では鹿嶋市の企業に勤めていた人物が祭事委員長を務め、消防署や市役所での勤務経験がある人物や、企業で管理職に就いていた人物を委員会の役員として招聘し運営に臨んでいた。木滝集落においても同様に、教師経験者や企業勤めを経験した人物を祭事委員の中心に据えている。一方、柵木集落ではリーダーシップをとれる人材がいなかったことが不参加の理由の一つとして挙げられ、石神集落でも企業に勤めている人々を参加させることができなかった。これは大規模な人員や資金を管理し運営するにあたって、公機関や企業等で培われた組織運営力が最大限活用されていることの表れであり、そのような背景を持つ人物を祭頭祭の運営に取り入

れることができたことも清水・木滝集落の参加を可能にした要因といえる。

さらに祭頭祭にとどまらず、自治組織の日常的な活動が参加の決め手になる。祭礼の運営に組織運営力が重要であることは上で述べたが、そこに加えて町内会等集落の自治組織や集落内の行事が健全に営まれることで形成される、地域の一体感や住民同士の横のつながりも祭頭祭のような大規模な祭礼を執り行う上で重要だろう。清水や木滝では毎年盆踊りや運動会が行われている。柵木においても育成会による町内掃除や老人会メンバーによってゲートボールが行われている一方、石神では組対抗のソフトボール大会が消滅するなど自治組織の活動や集落内の年中行事の開催可否が祭頭祭という大規模な都市祭礼を行う素地となっていると考えられる。

これら自治組織の中でも特に婦人会の存在が祭礼の運営を左右すると指摘できる。祭頭祭においては囃し上での担い手として、加えて衣装の管理といった後方支援としても女性による組織の存在が不可欠である。清水では子供会と一体となって婦人会が盆踊りや集落対抗運動会の運営にあっている。木滝では集落内に婦人会が現存しなかったものの、当番集落卜定に際して新たに女性部を組織し、祭事委員会に加わった他、「あんば囃し」という踊りの練習に参加し連帯を強めた。

昭和30～40年代に進められた鹿島開発により、鹿嶋市・神栖市は大きな変容を遂げた。人口変動や就業構造の変化に加えて、少子高齢化をはじめとする社会情勢の変化は都市祭礼の運営を困難なものにさせた。そのような状況において、清水・

木滝をはじめとした氏子集落は地域の垣根を超えた囃し手を招集し、柔軟な資金調達を行うなどの対応を取り、祭頭祭に臨んだ。さらには集落外の企業に勤めていた人物を祭事委員の中心に据えるなど、開発によって変容した集落社会に柔軟に対応した運営を行っている。集落外の人物や、農漁村集落とは別のコミュニティに属した人物を導入している点が祭頭祭運営の特徴といえる。

Ⅵ おわりに

本研究は鹿島神宮氏子集落を事例に、社会情勢の変化に対する都市祭礼の対応を明らかにした。

鹿嶋市・神栖市は開発による離農や勤め人の増加に加え、人口流出や少子高齢化など様々な社会情勢の変化にさらされ、祭礼の維持・運営が困難となった。人手不足や資金不足を理由に参加を辞退する氏子集落が現れるなか、清水集落や木滝集落では外部の人材も積極的に取り入れて人手を確保し、従来行なわれた一律の寄付金徴収を緩和・撤廃するなどして少しでも多くの住民から寄進を集めた。

上記の通り、担い手が不足している状況において、集落外の人物の導入や、小中学校の児童・生徒の参画は、当番集落を超えた新たなつながりを生み出す。また、集落外の縁者や勤めに出ている人物が囃に参加することは氏子集落としての認識を再び想起させる役割もある。人口流出が激しい現代の地方都市において、都市祭礼は集落を問わず新しいコミュニティを形成する役割を有するようになったといえる。

本稿の作成にあたり、鹿島神宮権禰宜の中嶋勇人氏、息栖神社権禰宜の小浜清一氏、鹿嶋市教育委員会社会教育課の皆様、鹿嶋市経済振興部商工観光課長兼フィルムコミッション推進室長の飯塚和宏氏、鹿嶋市政策企画部広報推進課課長補佐の齋藤智美氏、清水集落祭頭祭祭事委員長の宮川秀文氏、木滝集落祭頭祭祭事委員長の信樂愷氏をはじめとする木滝集落の皆様、中集落区長の菅澤智浄氏、石神集落元区長の野口敏正氏、NPO法人はまなす楽遊会理事長の汀安衛氏をはじめとする多くの方々にご協力頂きました。末筆ながら厚く御礼申し上げます。

[注]

- 1) 鹿島神宮ホームページ「御由緒・御祭神」(<http://kashimajingu.jp/about/%e5%be%a1%e7%94%b1%e7%b7%92%e3%83%bb%e5%be%a1%e7%a5%ad%e7%a5%9e/>, 最終閲覧日2020年3月1日)
- 2) 鹿島神宮ホームページ「御船祭」(<http://kashimajingu.jp/feature/%e5%be%a1%e8%88%b9%e7%a5%ad/>, 最終閲覧日2020年3月1日)
- 3) 片方の当番集落が不参加を決めた際には、参加する集落に対して500万円の寄進が行われる。

[文献]

- 茨城大学地域総合研究所 (1974)：『鹿島開発』。古今書院。
- 卯田卓矢・益田理広・金 錦・細谷美紀・久保倫子・松井圭介 (2013)：入善町道市地区における浄土真宗の講組織の構造と維持要因：地区の社会構造に着目して。人文地理学研究, **33**, 67-86.
- 鹿嶋市史編さん委員会 (2005)：『鹿嶋市史 地誌編』。鹿嶋市。
- 神栖町史編さん委員会 (1988)：『神栖町史 上巻』『神栖町史 下巻』。神栖町。
- 記念誌委員会 (2008)：『高松公民館開館30周年記念誌』。高松公民館30周年実行委員会。
- 金 賢貞 (2006)：都市祭礼におけるヨソモノの存在とその意義－茨城県石岡市常総社宮例大祭を事例に－。日本民俗学, **246**, 1-30.
- 財団法人鹿嶋市文化スポーツ振興事業団 (2011)：『図説鹿嶋の歴史 原始・古代編』, 『図説鹿嶋の歴史 近代・現代編』。鹿嶋市教育委員会。
- 祭頭囃保存会 (2004)：『鹿島の祭頭囃』。祭頭囃保存会。
- 坂本優紀・石坂 愛・武智玖海人・周 安琪・岩井優祈・篠原弘樹・白 奕佳・松井圭介 (2018)：地方都市における祭礼の変容－土浦八坂神社祇園祭における氏子の対応に着目して－。地域研究年報, **40**, 51-74.
- 佐藤弘隆 (2016)：京都祇園祭の山鉾行事における運営基盤の再構築－現代都市における祭礼の継承－。人文地理, **68**, 273-296.
- 武田俊輔 (2016)：都市祭礼における周縁的な役割の組織化と祭礼集団の再編－長浜曳山祭におけるシャギリ(囃子)の位置づけとその変容を手がかりとして－。年報社会学論集, **29**, 80-91.
- 藤永 豪 (1999)：都市近郊山村における住民の就業変化と村落社会－佐賀県脊振村鳥羽院を事例として－。地域調査報告, **21**, 39-50.
- 柳田國男 (1942)：『日本の祭』。弘文堂書房。
- 渡辺康代 (1999)：近世城下町における祭礼形態の変容－下野国那須烏山を事例として－。地理学評論, **72A**, 423-443.